



八13  
4433  
1

嘉永七年甲寅仲秋新鐫

新明合戰記  
全部五冊

禁賣買

山豐軒



金指圭

妖孽示凶々屢到君臣如醉  
揔無知大明々裔英雄將虎  
躍龍飛恢復思

題詞

小台山十日寺座主



卷中目録

卷之一

第一回 操塚の古跡小方氏感及事

第二回 東花孃土兵起して復讐の事

卷之二

第三回 東花孃明末の正統を尋る事

第四回 開青坡小官軍大敗の事

卷之三

第五回 朱烏南明王の位小昇事

第六回 明軍廣州府を攻る事

卷之四

第七回 明軍廣西北を畏る事

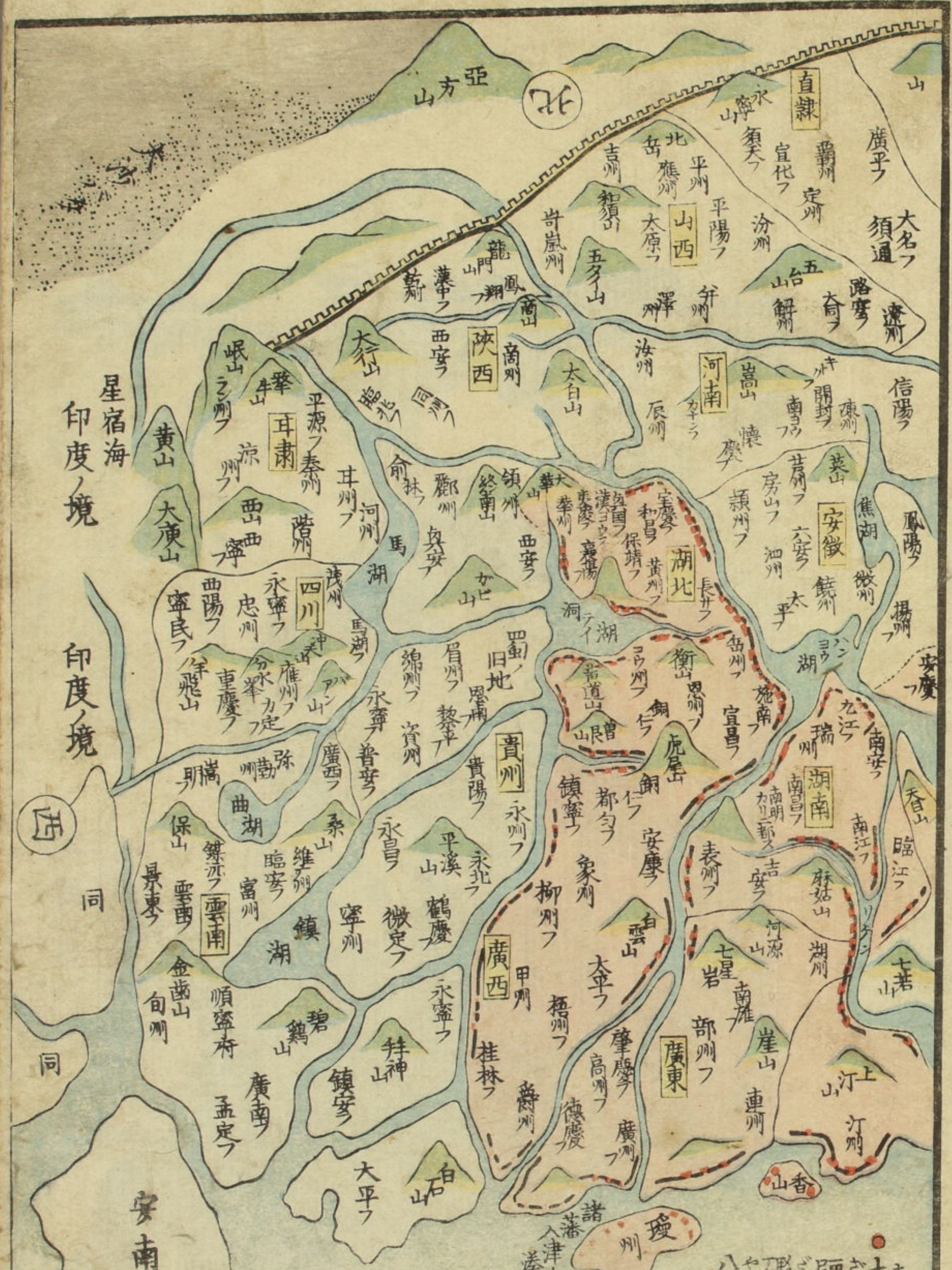
第八回 卮照遠謀明軍福建を退る事

卷之五

第九回 鄭天麟勇鎮江府を襲ふ事

第十回 南昌小明の王城を籠る事

摠目録畢



赤きハ明の封疆  
 小築まろの  
 八重土堤ありて  
 の發煩と防  
 城に石門後  
 此時明の  
 此の地の  
 公國  
 四重  
 日本  
 廣



清国と二京十八省不別つ  
 省と日本五畿七道也  
 の内小  
 明末興て湖南省南  
 昌府と仮の都  
 年号と天徳と建  
 時まで明の畧  
 地の色を分てり此右  
 地ハ後編小再圖  
 つまびらふ



清軍猛將 呂醜



大明國再興之魁首

東花嬢

福建の軍門 猛赤風

大孝子朱鳥  
字伯來后  
大明皇帝の  
位即



大明再興の大元帥

起龍先生耳照



大明再興の勇功臣  
今國姓爺鄭天鯨

尺



あまもろ人々の罪ありて天つらの乃とらうしあひ居まて  
地つらの道とらうしあひ死とあらんども国恩ふむらうとあひ  
りのあく。終ときけて時とらうしあひひきあひ不属人とらう。  
饒速乎の人情とらひひあぐら。原をとり。韃靼の北狄とら  
利ふのそとらうして。ひさうも義氣ふるまへとぬく道を  
ひきまふりのも。終共のつらふ不經らまて。つひあらうと  
遂るそあとのつらふ。このあふ不英賊が殺百艘ふとせださ  
けら。客軍不款。いばる軍中あまて死亡。ゆる。自国  
の民をらまうし。終あまらさ。和後。のうふ。年くあわくの  
英金とあらう。そのつひ。大うとあうとせうらぬ。不務業の

つらふ不。義とらふあうし。財貨とらうね。倉庫がらの吏ら。  
あらんが。月不并ひどく。税をとり。て庶民をあらう。げ。朝廷  
の群臣。納給のつらふ不。賞罰とらう。つらふ。恨とらう。き  
王命ふ。あう。つらふ。備後もあひ。まて。知縣師士考あひ。  
つらう。の遺恨をとり。みどらふ兵器をうとらう。つ。唯。旗と  
あう。つらふ。やう。つらふ。わりて。湖上。さう。つらふ。あう。改た  
あう。つらふ。あう。つらふ。つらふ。海盜。法。処。不。悔。死。して。屋。と。焼。人。を。屠。り。  
伏。室。妻。妾。を。劫。奪。さ。ま。ま。と。ら。う。那。司。あ。ら。う。ら。ま。弱。あ。て。こ。を。を  
あまもろも。逮捕せま。下のあげきとらう。つらふ。つらふ。つらふ。民。塗。炭。  
のつらう。つらふ。老。少。男。女。賢。而。肖。と。あ。く。と。と。ら。う。ま。ぬ。り。の。ぞ





せざるうらぐ。猛赤風おちひ小懸てころさんとあがりーが。  
可憐花をおうめもつくさで救まらんせんあーとあひけん  
女まりのふらつらひかきし。日とあまふらつらとれあふ。  
俺ふうーつくやう徐せようーと侍女ふやごねてをがまふ。  
おーこめて措りーが。ある夜方氏とひとめをぬきこて。  
ひそく小後堂を志のひと。珠の石ぐれをのり紙へ。是ふ  
まろてを。亭も襦をのりまーものうら。ほくくぐと  
おひの中。追ひのうらうら。必死あま。由縁の許し。あふと  
よせぐー。若侍あまふあま。まの仇ひとさー  
ありとつらやうら。みを渡さんと。おひをさるふあうねども。

仇々當時のまひひつらき。この福達の軍門ふて。そのまゝ王伯  
ふとあう。ゆかぬ。ひよりちうらきて。慈とく。ま細もれー。  
さりとて。仇ふ身とまろー。かまが由縁をうらふて。うらみと  
く。是ハ猶うらねど。操のまふ操をや。やうく。若葉ふ死あふら  
本意あう。は。ま。か。く。て。も。懸。う。う。ぬ。ま。ま。が。う。て。あ。ふ。ら  
せん。死。び。き。時。ふ。死。あ。ま。れ。死。ま。る。あ。ま。ま。を。解。あ。り。と。古。人。の  
令。云。た。が。の。ま。ま。ふ。あ。り。あ。り。と。か。く。ご。と。き。ま。あ。て。黒。白  
も。あ。ら。ぬ。闇。の。夜。ふ。懸。ふ。あ。く。あ。お。と。て。そ。溪。川。あ。く  
免。と。嶮。峻。う。ら。睡。より。その。身。と。む。う。う。く。夜。あ。く。渡。の  
急。流。へ。き。ん。と。あ。り。ま。は。あ。ま。の。ま。う。ま。う。く。ふ。あ。づ。ま。も

中つむぎをうりもたむくおーおがききて川下ちるうふ  
おがきおけん蘆おひ茂つー丘のふふふひつたて身  
うごうばこのとたえとめくんづけん命おつふあうりけり  
おられてさきさきんぞと若おがきふあうまんて身とおさ  
せの蘆の節ふ裳うみく自はあうはうさちあう  
うみくさう裳をうんさ身とおははううのちる月  
教ふあうりとらんを丘のうつら樹本若後と寂寥  
うらわさくふたひある石碑ありその処をうづこ  
どとお海つらあくも立あうりてねまうさ衣とあうり  
り中つむぎの石碑の石よりふさきとんをば碑面ふ

大文字小操塚と聚あうりつと聞むう一明末小国  
姓爺鄭依切の母らその丈老一官が清ふあさむりきて  
うらわさくさた世をえうあうりてあせうがその處洪塘  
浦の汀ふあうりつたう土人うらうりて鄭氏文婦  
の徳を志しひそ丘小埋葬一操塚とつひあうりて  
建つらうりて色バ遠処ら洪塘浦あうりんそのち成切  
のうらや兵とあけて福達小威をふるひーわすひあ  
時のまうりおさうさうりーが成切つひあうり折けて  
臺灣ふあうりてさうりより今うら古跡とありぬ吾荷  
文婦もあうりて鄭氏の徳ふあうりてねまうさ



おちど ね津日不死ぬるこの身ら子もたをまは涙吊ふ  
ゆのちあさけあや 脩羅の妾机をうす初あくとらうと  
ぐつとまのうと死をむくのぞ死ぬるらあかーと  
と要時あまごふらきらるぐきつと思ひうくま中  
あまどいよ吾侪の敵が人あくなきをバアそ辱めも  
まま女あつても晋の縁懐ふあうめて慈をくさ  
やいとそあこの穴をあうとつ。白波あんどが焚きて  
けん 柴火のゆえーきりありけるをさひひありと柴  
くきよまままバつちまも 燃て煽くつらそのとき方氏の  
あゆの無る。常をとたつぬまいつまふ両眼をむいて

うーちより。幾重おもまるとひきまめて葡萄卧つ  
くごんの 柴火の炎くううとこれとこが真つきのまて焼  
らまバ 眉鬢の毛ふゆえうらる。苦痛ふ堪を記わたりて  
無るやどあうあさくも。うとまき。常をとたつまは真の  
さうあり取上まて火傷ごまても眼もつがまは泣啼  
いさぬ。いりあ烈女のたましい紅顔うら花の眉まりの  
黒髪一変して 醜きあんどりかまうりれ。かくてどらち  
あまらうとと方氏と疾をらう。はやくて操極ふ打  
むうひ。浮深合掌してむう。も今もかうらうらあま  
あまて毒のうとままひ。あたまこの身とてまけてとと祈



喉奇とよむるる氣中とさへ襟袷のせこも泣赤子不  
乳をふくまして愛らした。貞あがめつう色ひの仲の  
んかりふぞ育ける。

第二回 東花塚土兵を起して渡熊の事

あゝ不猛赤風とその夜さうり。方氏が見へむありいと  
きくより。下官と法方へちりて。濃あくくろひめぐ  
せども。わけてはめくく。志まねば。開が氏族をうめたり  
て。所責の答をわのまども。突ふあくくさうこそあれ。白状  
まごきようもあく。果の突屋ふせめころさき。と。猛  
赤風とせめてもの。冷熱揚とどよろこびける。かゝる悪事

を行くとも。権威ふおそえてわくくさぬ。罪をゆたさるもの  
もあけ色。いよく。帰るところもあく。奸曲とあり。いまや。  
政及黄金のひうりふりらきて。民のくろく。と。大く。あつた。  
ある日赤風。携ふりて。一羽の野鴉を獲まくり。あり  
して。従者ふとあきて。さひたり。暁乃。泣く。ひ。追ふけり。  
そもく。籠ら。獸を。逐ひ。多と。ち。て。田圃の。害と。陰さ  
因ら。ま。下。情を。さ。り。て。諸庶民の。苦。悪と。あ。る。と。あ。ん  
あ。る。を。今。ハ。その。本。妻を。う。あ。ひ。極。興。娯。楽の。こと。と  
して。年。不。歳。交の。う。だ。り。も。あ。く。山。中。郊。外。あ。く。バ。余。も  
わ。く。ん。不。農。民。辛。苦の。田。圃を。い。と。ひ。げ。も。あ。く。踏。あ。る。を。

その害を黙してたつりたまさきなり。命するほどゆるせき猛赤風の  
 志きりふ一羽の岫野鶴を。おひひくくこの善より。わら  
 くるまのづる女を児の。腹をきてかみ羅刹より。もまこおそ  
 ろした面相ある。不思氣憤然たる。つさむひ極く。目んこ  
 さまははく人。よきこそ。求免田が妻。方氏あまの。體を  
 むくちんと。敵まてく。女の念力。おひひ志を。やとから  
 りのづる。劍と振て。ちりて。よき。バ。虎狼ふひ。くき赤風も。  
 おひひげね。おひひ。遊人と。つ。わやま。ちて。角は  
 ころろつら。ま。く。喉や。と。ろめ。く。わど。も。わ。つ。は。く  
 きて。ま。ぬ。る。近。後。の。武士。この。わり。き。ぬ。と。入。る。う。り。も。う。き

これひくく。ちりて。より。狼藉の。よ。と。お。つ。り。ま。け。バ。猛。赤  
 風の。こ。ま。不。氣。を。得。て。突。き。一。落。疾。を。り。の。と。も。せ。ば。や。ふ。り。ふ  
 方氏を刺ころ。一。後。者。不。命。ト。て。無。難。ふ。も。そ。が。ま。川  
 溢。お。と。せ。が。か。つ。る。凶。変。不。興。さ。め。て。赤。風。の。後。若。と。う。ち  
 が。一。お。さ。く。非。常。を。い。ま。め。て。博。中。つ。そ。う。り。け。る。  
 わ。と。あ。ら。土。地。の。り。の。ど。も。が。方。氏。の。害。せ。し。ま。と。り。て  
 つ。ま。て。薄。小。の。こ。一。志。嬰。子。を。さ。ぬ。ぐ。ふ。り。と。り。と。  
 東。海。と。り。ふ。り。の。聞。つ。つ。て。ど。が。養。ひ。子。ふ。ま。さ。り。け。り。  
 さ。ま。バ。こ。の。東。海。と。せ。え。一。福。縣。ふ。あ。ら。び。あ。き。代。を  
 か。さ。ひ。つ。る。富。家。あ。ま。と。も。仁。愛。ふ。り。き。性。あ。り。て。窮。民。を



極むる春雨の草木とどつがごとく。殊にひろく客と  
して。孟嘗君が凡わりけは。義氣勇悍の人と  
あり。一髪をこめてるもの。文武技のけぢめあり。  
あまを家の中へあひおき。武とまを財をこくちて。其  
家。齊とたをけるも多うり。かまをを国他邦より。  
名とほく。少。徳をあらうて。さげねあるものひきも  
きうねど。代く巨萬の富とためて。さうとどつめ  
こちありけり。さまごも東海とかのまをさつめ  
いまご子あまも。毒をかう。廉食し。身の中  
あまを人いよう。こまを賞し。福徳長者と号し

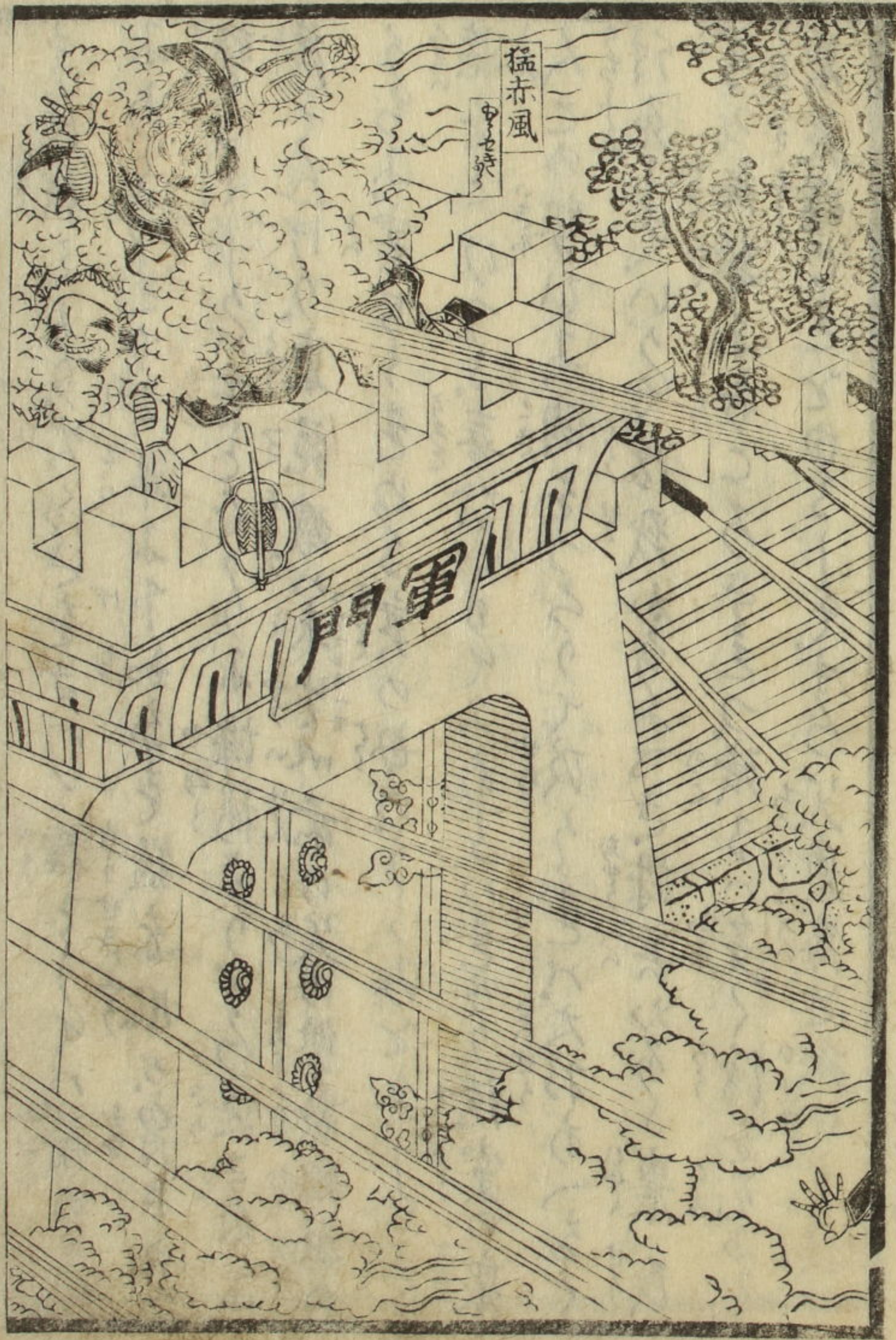
けり。かろる身も東海と不孝のりんと。第一さ  
後あまを辱るおろ。方氏の貞烈を感歎し。て。  
わとこのこと。志疏をひろひとりて。さごみおし。つ。  
支那があまひ。小養育し。掌中の玉とせむ。つ。  
し。と。年月と経るも。に。成長あま。さごひて。容  
貌。美麗玉とむ。わごむ。き。一。と。き。て。万とある。秀  
才。伶俐。群。ぬ。け。て。兄弟。あ。け。は。ど。も。六。行。ふ。し。  
○。明。友。不。傾。あり。○。ま。う。し。き。り。の。あ。め。ぐ。む。以上。こ。ま。を。六。行。と。り。ふ。六。藝。  
○。禮。儀。射。う。け。し。と。こ。ろ。あ。け。は。毒。こ。ご。り。て。身。少。女。と。  
賞。歎。せ。ぎ。る。の。ゆ。え。東。海。交。婦。よ。り。こ。び。ふ。と。ん。

東花壇とよび做し、いよく諸藝とまをむるを  
小年十三四才あり、比より凶年のころあつきて  
依りてあへて肌體ありしが、今茲と列て春の  
季より、福建浙江の地旱魃して、五穀ちつとも実  
のつね、多氏おひひあつて、み結ひて、疾病隊  
死するもの多うるあぞ、東海さう小借げもあく、  
たつとところの穀物とめて、粥小煮て、親疎をさうこ  
む、窮民とくらひ中、あひを邦他那ふつて、まて  
茶、強と多く、ちつせ、ば、ご、ま、ご、め、ふ、勝、と、の、が、を、て、  
救、を、さ、う、の、幾、百、万、人、ど、の、よ、ろ、こ、び、巷、ふ、ち、あ、ぬ、

あつるふ又うとせら、霖雨うちつきて、滋あるまざる、家  
計ともふか、あがさきて、漏死するものいと多く、たす  
けぬ、命とひらひ、ひ、の、も、田圃とて、是て、會おあ、肌、患、小  
せまりて、道路不附りの殺りたりもあうり、う、東海、の  
こが、倉庫の、空しくあるも、さう、ふ、い、と、を、死、ま、さ、う、  
を、ら、ひ、養、ふ、あ、ぞ、万、民、渴、作、し、て、志、と、ひ、よ、う、と、を、定、め、  
敵、鬼、の、佛、を、の、ど、と、て、慈、恩、普、濟、を、た、の、む、か、て、  
今、う、と、軍、門、赤、風、と、甚、懸、を、さ、う、の、傷、人、あ、を、た、ご、ま、  
ふ、あ、さ、う、あ、ま、さ、の、酷、吏、さ、う、う、る、凶、ね、ん、あ、も、後、と、あ、  
さ、げ、責、を、さ、う、と、苛、ひ、ど、ろ、を、衆、民、を、の、虐、政、を、

うらみていよいよ東海を視のましくお志すよ  
猛赤風きつて東海をいづくそねも渠奴不罪  
を願し首と別てその家財を没収おさる大ひたる  
利益を汲んとひそく下司と志めし合し東海  
系貸と垂おちし衆人をひきよきて係るんを  
企てりといひまぐしやぐくうへて禁断せしう  
死とまぐてまき茶生高賈人まこの年未だ  
まを遊客の武丈文士おあひひいりて教子人  
校の如くおおりの恩人とおまぐらん東花壇不  
随後しく株中へおまぐ入るべ城兵おあるたわす

はく遊やとあんとまぐとものともせは破るひたる  
外してまぐむお株中男の沸がてくよと下つと  
動も猛赤風おあひひいり士衆おまげし下知と  
つてて系鏡をつるべまおしう此方も鳥合の  
わつまり勢恩あふ命とおまぐまぬりのうら  
ひとりも兵具せは幾番城あうりし系鏡  
ふうちあうまききて志を懐しなぬらふり  
東花壇とちどめよりうて準備を志すり  
獲筒の系鏡を懐し懐中より奪ひて城兵等  
がいともまげし連發する筒さたとちりひる



まはれ我より火をきめて櫓とらへば櫓のう  
 不あうりきて士卒不下知あま猛赤風が曾さう  
 撃こころの苦とむりし小楯櫓よりまの逆さぬ小  
 落てんげり東花癩の末せ以前の父の能款禰強の  
 うち不害せしきぬる実の母のうみとくしと素  
 懐をとげつる喜びおめで不あうりきなり流堂の衆  
 人この勢ひ小岡をつらりて攻りまはれ大おあへて  
 付死していうで防我かあふべき楯兵おろく農民  
 等が御整不おころさきつ残る人多く隙を乞ふぞ  
 東花癩こそとゆりしてまづ父東海と袂中より扶け

出して無事と後流堂の衆人をねぎらひて久不あふ  
 福建省の軍門が大楯小あんあまは兵糧軍用令をま  
 くら倉庫を困き衆人のまふくこそととせけり  
 かくて東花癩の衆人小むらひ不我の奸賊ありといども  
 軍門を殺害してその楯を隔しとらたど恩義  
 のつめせし所為ありといえ孰りあるさん垂不殺逆の久  
 とのがま下かあるよとせあまは辺野の知縣知府  
 かまら軍兵をかり得しとまを付人と攻まあん  
 各済と唯家父の大人をまてまんむりぞしと野為あ  
 まは我ひとあてこのまに今より親子めあともは山林



朝廷の大后おろひふおどろきこの旨を奏聞しけはバ帝  
 安うらびおろしめ梅祿王遠毘總督石嵐虬の兩将  
 逆賊退討を命しめ速う小桑向して大切を奏す  
 べしと勅詔をうけく大お遠毘副お石嵐虬北系  
 勢三万餘騎小強国の軍勢を併得して於合六万八  
 千餘騎順天府より福建まで行程おろそみ百餘里を  
 二十六  
 丁一里  
 りみおろそみ進發せり

新説明清合戦卷之一万

